

下水道マンホール蓋のデザインの変遷とその背景 (その1) マンホール蓋のデザインの変遷

(株) 奥村組 ○正会員 大槻 弥生 (株) 奥村組 正会員 川嶋 英介

1.はじめに

近年、下水道マンホール蓋のデザインが多様化してきており、地域独特のシンボルマークや特産品・名所・歴史等をデザインしたものが多く見られるようになった。筆者は現地踏査を中心にこれらの特徴的なマンホール蓋の調査を行っており、のべ4500枚、日本のほぼ5割の市町村について調査が完了した。ここでこれらの資料をもとに、土木史的観点から下水道マンホール蓋のデザインの変遷とその背景について考察していきたい。本年は(その1)マンホール蓋のデザインの変遷と題し、マンホール蓋の歴史について紹介する。

2.昭和60年以前

図-1にマンホール蓋の歴史を年表にしたものを示す。マンホール蓋のデザインは、昭和60年を境に大きく変化する。昭和60年以前のマンホール蓋のデザインは、一言でいうと地味であった。

安土桃山～奈良			幕末～江戸		明治	大正	昭和			平成			
奈良 平城京に下水きよがでる	平安 野玄式便所が高野山にできる	安土桃山 大阪城下町に下水道ができる			M5 銀座大火のち街路の下水設備ができる	M17 東京神田に汚水排除も含めた近代下水道ができる	M33 下水道法が制定	T11 わが国最初の処理場(三河島)運転開始	S30～50 国内にJIS模様と市型模様、メーカー模様が混在	S33 新下水道法が制定	S36 第1回全国下水道促進デー実施	S40 流域下水道工事着手(遷居川)	S50 特定環境保全公共下水道事業が創設
												S60 建設省下水道課がオリジナルデザインマンホールを提唱	H5 全国事業体が競い合ってデザイン化を進める
												H10 飛散による死亡事故があり安全性がクローズアップ	H18 デザイン性より機能・安全性を重視した蓋が増え始める
												H25 H26 第1回マンホールサミットが東京で開催	H25 H26 ARマンホール登場 ※1



※1
ARマンホール
単なる広告ではなく、『AR(拡張現実)』を活用した動画再生機能をもった蓋

図-1 年表

図-2は、日本に現存する最古のマンホール蓋と言われる『鑄鉄製格子蓋』(函館市)で、明治中期の物である。昭和33年にJIS規格(JIS A 5506)が制定されると、蓋のデザインはJIS、市型、メーカー仕様などが混在するようになる。写真-1に示すJIS型は、JIS規格票に参考として添付された図面をもとにデザインされたマンホール蓋である。この付図には備考欄に「模様、紋章座及びガス抜き孔は、参考として示したもので規格の一部ではない。」と記載されており、各都市やメーカーでそれぞれ独自にデザインしたマンホール蓋が製造された(写真-2, 3)。これらのように昭和60年以前のマンホールは、現在のように特徴的なデザインは有しておらず、機能性を重視した単調で幾何学模様のマンホール蓋が中心であった。

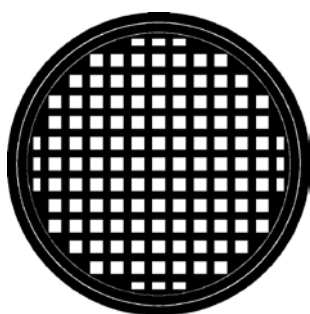


図-2 鑄鉄製格子蓋



写真-1 JIS型



写真-2 札幌市型



写真-3 メーカー仕様

キーワード マンホール, マンホール蓋, 土木史, マンホールー

連絡先 〒108-8381 東京都港区芝5-6-1 (株) 奥村組 東日本支社 土木技術部 TEL 03-5427-2322

3.昭和60年～平成25年

昭和60年代入ると、様々なデザインの施された蓋が広く普及し始める。これは建設省都市局下水道課の専門官がマンホール蓋のデザインの多様化を提唱したことが契機となっている。筆者はこの方の話を伺った事があり、当時は下水道のイメージが非常に悪く、唯一の目に見える下水道である「マンホールの蓋」にデザインを施すことで親しみを持ってもらおう、と考えたのがそもそものきっかけだったとのことである。この後、昭和61年に建設省が『下水道マンホール蓋デザイン20選』を選出、更に平成5年に『グラウンドマンホールデザイン250選』が建設省下水道部監修で発刊された。写真-4, 5は前述の20選に選出されたマンホール蓋、写真-6, 7は後述の250選に選出されたマンホール蓋である。昭和60年代の時点で緻密な模様や美しい彩色の施された蓋が存在している事は驚きであり、それだけ当時の下水道関係者の親しみを持ってもらいたいという思いが強く表されているのだと感じ取れる。

昭和60年の建設省の提唱は、まさにマンホール蓋のデザインにとってエポックメーキングな出来事であったと言えるが、そのことが建設省からの「通達」という形によらず、専門官の情熱の結果であるところが興味深い。



写真-4 鶴岡市



写真-5 大宰府市



写真-6 蓮田市



写真-7 松本市

4.平成26年～現在

平成26年3月に、秋葉原で第1回マンホールサミットが下水道広報プラットホーム(GKP)の主催で開催された。その後も、神戸・大和郡山などで開催され、平成29年1月には通算6回目となるサミットがさいたま市で開催された。これには約三千人が参加し、マンホールに関するリレートーク・グッズの販売・県内のデザイン蓋の展示など様々なイベントが行われ大変な盛り上がりを見せた。

更に、平成27年にマンホールカード(写真-8, 9)の配布が始まり、現在170種類のカードを全国で配布している。現地へ赴かなければ手に入れないカードではあるが、それを目当てに訪れる人も増えてきている。運営者であるGKPの方に話を伺ったところ、関心を寄せている市町村も多数あり発行も順番待ちになっているという。実際にカードを入手しに行くと現地の観光案内と共にカードを配っている所も多数あり、市町村の特徴を知ってもらうための「窓口」としての機能を果たしはじめていると言えそうだ。



写真-8 福岡市のマンホールカード



写真-9 豊橋市のマンホールカード

5.おわりに

本項では、これまで撮影してきたマンホール蓋のデザインについて年代別にまとめ、紹介してきた。次項では、昭和60年の建設省の提唱をさらに掘り下げ、どのような経緯で立案され、それがどのように各自治体に広がっていったか調査し報告したい。また今後は、蓋のデザインの選考過程についても踏み込んで調査していきたい。